

---

# 勇者アキの褒美

ソムニウム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者アキの褒美

### 【Nコード】

N5475P

### 【作者名】

ソムニウム

### 【あらすじ】

勇者の褒美はどんなもの？ アキが望んだものは……

「勇者よ、面をあげえ。ドラゴン退治、大儀であった。そちに褒美をとらす。何を望む？」

異世界の王は、玉座から階下に跪く華奢な女に威厳ある声で問う。

謁見の間が、にわかになじめいた。

勇者と呼ばれた女を一目見ようと、登城を許された有力貴族たちが押しかけ、両端に勢揃いしていたのだ。

王宮侍女たちに飾りたてられ、女性の正装ドレスを身に纏っていた女は、しゃらりと髪飾りをならし頭を上げた。

勇者と聞くにはおよそ不似合いな、その繊細な顔立ちと優美な物腰。

空気を震わすような、どよめきと溜め息を貴族たちにもたらした。

「なれば、お聞き届け頂きたい事がございます」

鈴を転がした様な涼やかな声を発して、女はニコリと笑った。

「……アキ様、どうかご勘弁を。お戯れが過ぎます」

勇者アキの願いはすんなり、この異世界マケロニ大国の王により叶えられた。

「あら？ 何がですか？」

城の一角、アキが滞在する客室に用意されたお茶を優雅に飲みながら、対面に立つ男にとぼけて返す。

「私を褒美に指名するなど前代未聞です！ 稀代の勇者が従者を所望などつ。あなた様の名に傷がつかますっ！！！」

アキの世話係である従事長のセインは、整った顔を歪ませ額に手を当て困惑した声を張り上げた。

「それがなにか？」

姿勢よく、カップを膝上で持ったソーサーに戻して、淡々とした口調で聞き返したアキに、セインはいつもの冷静さを欠いていた。

「お相手が王族ならまだしも私などとは分不相応ですっ。どうか別の願いをご提示ください」

アキを見下ろす形の、デキる男の見本のようなセインは、珍しくうるたえている。

「だって、事前アンケートで第三希望まですべて却下で衣食住は生涯保証。ならあとは婚活？」

こんなに慌てるセインなど初めて見たアキは、内心今までの作法や学問等での厳しい指導をした彼の、違う面をこっそり楽しんでいた。

「こ、婚活……？」

面と向かってそんな言葉を言われた事のないセインは、ただ啞然とオウム返しする。

「そつ。あなた上玉だもの。王族なんて堅苦しいの、わたしの性に合わないし。かと言って、勇者だなんて一生ムサイ肩書き押し付けられ過ぎすなんて、ごめんだわっ」

セインの目を見つめれば、セインの視線とぶつかり合う。

「じよ、上玉！？」

セインはかなり取り乱していた。アキはクツと心で笑う。

「あなたは生真面目過ぎるのが難点だけど、まあ軟派よりは誠実な方がいいし。万歳わたしっ。それとも、わたしじゃいや？」

自然上目遣いになりながら、小首を傾げて貴族たちを虜にした笑みをセインにも向ければ、彼の頬に朱が差す。

「……いえ。ともかく淑女として、ふさわしくないお言葉はお止めくださいっ」

アキのペースにハマりつつ、さすがは優秀な男、口元に手を当てがいながらも次第に冷静さを取り戻し、いつもの彼になりつつあつ

た。

「ほら、そこ。今は二人きりだし、いいじゃない」

ね、とまた微笑まれて、セインはその威力にかなわないことを知る。

「……アキ様」

はあと深い溜め息をつく優秀な従者に、アキはさらに爆弾を投下する。

「だって、王命だしっ。諦めて、わたしを奥さんにして下さい。こう見えて、わたし脱いだらスゴいんだけどな」

見ます？ とおどけて笑う稀代の勇者に、セインは今度こそ開いた口が塞がらなかった。

据え膳食わぬは男の恥。

か、どうかはいざしらず。長いものに巻かれた哀れな男が一人出  
来上がった。

こうして満25才で勝手に異世界召還された勇者アキは、魔物を  
気合いと八つ当たりで退治し、褒美にデキる従者を口八丁で手に入

れて婚活も無事に済ませた。

そして。

「セイン様っ。アキ様がどこにも見当たりませんっ」

「何っ！？ またかつ。城中お探し申せ。以前の抜け道はふさいだ。まだ城内にいらっしやるはずだ」

「はっ」

従者や侍女たちがセインの指示により、あちこちに散った。

「まったく。あのお方は……」

今日も今日とて婚約者セインに溜め息をつかせながらも、知らない顔でアキはドレスの裾を手繰り上げて、王宮内外を忍び回っていたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5475p/>

---

勇者アキの褒美

2010年12月30日22時17分発行